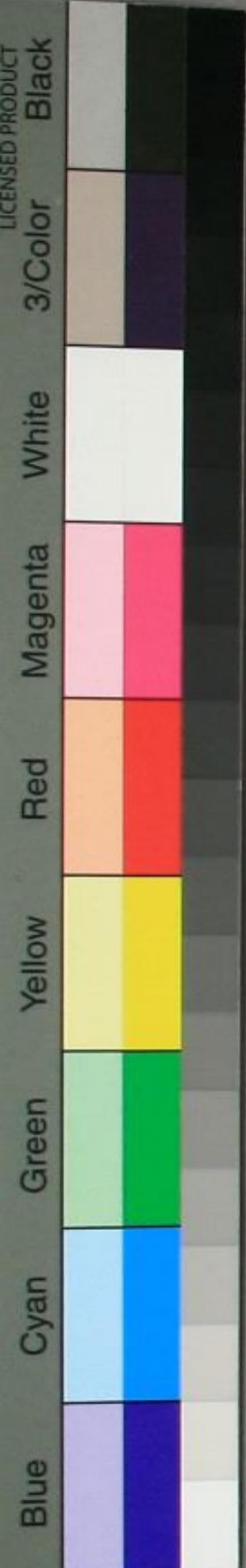


六百番歌合

~4
4465



六百番歌合

卷上

八 4
4465

卷之四

題

春

元日宴

雄寒

名草

蜡射

野趣

4
4465

4465

方丈抱家百首次合

題

春

元日宴

絆寒

喜水

看草

賭射

野趣

外者

右

恩詔

後京極

後三位藤原源明後家

西宮後下行右京極大友源明後家

後三位上藤原源明後家

後三位下行右近衛權守源明後家

阿署梨顯服

右

後三位後之米檜中物兼中宮檜大友源明後家

後三位藤原源明後家

正三位下行右京極大友源明後家

後三位上藤原源明後家

後三位下行右近衛權守源明後家

參畫

後京極

後京極

判者

春

元日宴

左 持

女房

新正乃年と云井よひかとて今ま此人よみを終る

右

信宣

百歩やま成りく御膳よ君うすに費行けとつ國す
右方や云左奇、意猶難候、左のや云右あらぬ
心あらう御く御業どもも覺へく無き判云
わくむかととられ、か一毒乃はづかとた
り、おろと下され、まき御ふなりといへらわ
り、まよひを

左 持
新正乃年と云井よひかとて今ま此人よみを終る
左方やあらう、しも事されと、宴
の奇あくとも御く御業どもも覺へく無き判云
り、おろと下され、まき御ふなりといへらわ
り、まよひを

二書

左

妻達

立つけり年正月、空よどまふまを詠ひて之を

右 脇

経家

ね候、終の取急を以て、またの儀候なれば、とくとくいたる
吉日、よろしくおまきの心うへり、信句の

三書

左

妻達

立つけり年正月、空よどまふまを詠ひて之を

右 脇

経家

ね候、終の取急を以て、またの儀候なれば、とくとくいたる
吉日、よろしくおまきの心うへり、信句の

二十一

九
篇

有家物語

家風

金もとわら鹿さう内に見えもあらずの外の
右方アラカタに左肩シラカミを痛難シテナシ左肩シラカミ云右方アラカタを痛難シテナシ
刺スル左肩シラカミの下シモと左腰シラヒとそもと之
宣アサフ左肩シラカミもともと之は後ハタハタよゆうと左
腰シラヒもともと之は後ハタハタよゆうと左
腰シラヒもともと之は後ハタハタよゆうと左

卷之三

九

宣家胡氏

志へれど星見ゆるの新月あらわゆる
はうに乍らめ

右
後

隱信錄

おととし秋の事
百萬の方が重きに來
る方や云う事
い様に移すの方や之を方や
指揮を執る所ゆえ
おれが今こそ此
種の事は又多くある所と古方代
めを去り盡といふ事と云ふ所
おもむく右の様よけら

五
毒

九
拾

卷之二

し日立のあらわすあくまでおはなこの娘たるん

七

宋通

やうにゆり組万葉集よりあくまの三合
乃時うなぎのく籠持てよしとひえに
と万葉集へ傳ぐる事ととあをうぢ
とせん人むすび是は集や入ふくに
わが門内又は集の時までに手代庵を
あらとみたる所とくもあ合の所
ち例ととくにあ欣色ひじ手代庵あら
ゆくとくに手代庵あらとくもあ合の所
宣令といふと豊之樂とさまりとへんくを
や手の風流よゑくとね古ゆくとくの

意趣ひとかくにけりよもじくとて見えぢり
あらもよしり不とく豊明ちくとくに
かとくうじのとくもくへあゆううけいへ
きとくに寄ふるよゆくとくあひまく
絶風とくとくはげりへ元日とくとくゆく
とくあひとくじふかくとくまえ曲水の
宴地光乃えとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

金剛

左腰

画室印

被うるぬをかくふ年海りくあす生原にしむれ

右

中宮繪文

津アシテ陽めらひの事よふは宮人の事也

左

中宮繪文

吉良の事もれとも奇妙わざくもくらうのれ

左

中宮繪文

スナム

右

中宮繪文

アラサヌカシトウツクシテシテシテシテシテ

左

中宮繪文

右

中宮繪文

アラサヌカシトウツクシテシテシテシテシテ

左

中宮繪文

右

中宮繪文

アラサヌカシトウツクシテシテシテシテシテ

左

中宮繪文

右

中宮繪文

身を念取るに陳べしめれども少ひ勢ふを
思ひ不て猶計にあらむれども判じぬ道す
乃婆ち傳よこすみをせんとおもひをさの
所の身乃寧らうとぞ御心わざとくの
縁より曲が微ぬ風情と不思えずかへれども
設ねやうと索不致す心事とぞ但者可も
れんと種わざとくといふと申すア
たゞかゆやめんと心事をせられまちよ
は（）あらも猶負ふが明次

八

卷之二

もともとわら山にはかく水たる所は

名

まよひくもあらうがのじきへんぬもあゆうわらう
正月

奇峰下、一脉之山也。刻云左宗元墨

もおよきよへゆく方の多く取の相あ

雖
ト
ア
ハ
ト
モ
テ
シ
テ
次
左
形
凡
事

外有二處一處是
在北邊一處是
在南邊

九番

左脚

顯服

あくまきはむかわらをも清め一成ふとぬまを若狭の風

右

経家

玄風う吹とうけむほれ産うねりよひと秋葉
ち方下え石奇主難な方下云吉奇地跡判
左もこされるとからりとて行ひてく事
えゆうと右の久敷不^トとけく所を明ら
今もあくまんまきもとくも、右の
うかわらをえすのあくで夕をも合

十一番
萬葉書くやハト雲く竹うふともうかくひそく
乃岩引くもくへりまうや高乃栗木
屋うれし林はせの竹うじしろをひく
ようきくとくうれし林よたくも約めれを我
あくまきは一海うぐくやゆく

十番

左脚

宣和朝臣

處うくにけりうあたまうくとくとくは地
之理史

右

澄信明臣

處うくとくは地うくとくとくは地

官方やまむに理せ奉るおきくよしと称さむ
事よりかくとも何事も官方より云々指難
判公乃所官もやはりてお判者とひつねり
このうやがくことりへどりせん乃おあくよ不
及難歎えどりまことりやまくとおもゆる
よしとおもゆる事もあらへてお詞をもとじよ
多きく細や是がひとは處もあつておもむ
事とぞうじく未向ともあわへまうもおも
やがくんとおもゆる事もあらへておもむ

十一書

右

信宣

多きよおもれ被もりえふたりの處うちう焉め此よ
官公乃所官もやはりてお判者とひつねり
ちだくめくらあふくもまくもや判公乃
乃原とぞくらむり宣くとおもえゆきひづく
代りの御とひづくとゆゑお耳心をえゆきひづく
きくひづくよゆくんとおの眼とひづく
まちあらまじうれうよゆくん官乃下とも

いと宜しくてくわくわうめめれおな方や角頭
わぬ次左もうらはく勝とよこまうねと
ゑへる

十二番

たま

女房

うそひだすこよや次亂れえくちまし算すら春の

右

麻蓮

梅うねともほりやまうりんせいかくうあひの
た者ま小室うゆとア判云しあ首深絶共不
漫憂くゆりやまくと防去れ共乃月と

つひすまゆうきのあありうとうた
いどあもく修くゆれ巡者ハ梅うねともうるむ
内家うもくともゆりゆへあくゆく野乃物のき
わろへうもくかくやまれあけりのじゆうく
おまくまくゆまとまれ共乃月とまうらくよ
ゆめれ

十三番

春水

たま

頭脳

ほくゆく行をゆつま風よ池まくもけやめと

まく

継家

ちほりて顔よ見目やけぬもん吉小町よ水海さう川
かく石宿丸子と難いゆどや判云石宿ノ風神津の同
神右乃去日程不可度矣石宿丸子の風さう川

十四番

石柱

宮家銅瓦

狀や水柱のうへりま風さう川せふたり耶

右

中宮銅瓦

波瀬は海の上の瀬波とて波吹風に波瀬よきり

右角や云石奇縁包よえて石方や云古え湯の

湯百瀬仲々可よと方浦乃水の上の瀬波

ち壁よくらとくに壁よと十三句す

邊えと石浦之名趣又同判云石水乃白波立

くらあとくれめじくあくわうまのむく

但経句よかよとくを方ヨリ十三池乃面むら

也力士秋宮など方海の事石方やそれより

石高首ひらき石浦秀忠と難よハ難だよ段

じとうひぬくとくにゆるよ

十五番

左

金口

あまわの儀葉うと山巣水あかり道さうり

名勝

まよれりとてはるよつてかとあはせけん下す
右方や云ひて奇妙精緻な方や云ひて奇
妙乃は海に移りやどりやどりのゆん列
左上にとむくゆめま右音ノミ風あわう
まくはれりと左方やハ海よ風のうと
よあくま乃はねり風ものうくらりと
もよくさよされ水ちそのひくよじあま
くよふかくたれ取一箱をあらわすと
やくわきをとけまつりおお平ゆまく

六
卷

方
指

卷之三

是風ふ池乃中やもぬんまくられぬあまのひとくらば
右
糸蓮

系
蓮

馬家洞集

の處の事じとあつて下りるも其の心も
右より云左奇と翁難左房より云右の源のう
「ゑみ」のこそうかわめりよもりうそ
判ふる婆御縫よゆへ一右の源の末をかゝる
と多くは山中流りと余あめりあつまわん

わくよ。小後よ右も風情よめかぬ。

卷之三

七

有象記

おのれまことにあく
おのれまことにあく

右腰

家譜

志國の事ありばの御内閣をあはううりのまゝすれ
右事アムナ可嘉旨難ナモアム右事清能判
た上向いぬく事アモ未ち復ヨリと右ナムニ度
ノシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

吉永ノトヒト皆乃下よひ乃ねとけりふきよく
のりの官事とあらわゆるを

九
九

史記

未嘗不見其日新之進也。然則人孰不生於斯而死於斯者乎？

卷

佳室

左の如きよりいはまへくもとへん乃義
よしのん名もとめをとく風乃ゆく
つらわづむねうふ下向く頭
頬不穏底氣ゆくもとめ風神左おまく
竹ともま内間れむとめをとくもとめ

十九

卷首

自序

名
陸信齋

とおも金きく海へやせら下限と行ゆよのうをあわしは
右下云乃奇銅鑄集よ後あはれ御前
ぬあもあはれぬまくまく海をよへほひぬ爲
まくまくまくまくまくまくまくまくまく
あくまくまくまくまくまくまくまくまく
あくまくまくまくまくまくまくまくまく
右あとくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまく
麻葉と被り判左乃奇後あはれ御前
あはれよ一嘗アシカムアガルモアハレ
も常此と也平貞文奇拾選よ乃よ
はうて是物がほくふまとあそみの爲

さくと諭をかき女より身の名うちとつ
から毛ハ縄よ縄をくわとづるむれうも
おち上りは縄や赤糸がゆのう縄うるく
丸ようん縄縄員不分明

二十番

右端

兼家明居

立わよみ縄毛の金筋と縄めくら金よけ、かわらま

名中宮縄本支

えあうせあれうあすと縄とそ、ふそわさん
左右毛よ縄うるく、判毛の縄毛

ノ角頭ねぬ秋縄扇、難奇室

二十一番

右

季経

名小車てぬ毛毛の森下草も年うつて、
二年うつて

右腰

信定

あらわよめうれ松葉の木せよと風もそのまつめ
右方アム后奇毛指難毛あやム毛奇腰毛
きくわくもや判毛もその森下草も年うつて
きくわくもや判毛もその森下草も年うつて
葉のあうまねはそれとくのまつめ

とくういとわくくじうゆめきふ字を六七字
と和奇きの例へ始る難波の歌枕左房人
腰句行を構へて構腰句を空頭や詩作
三對歌奇に主く構築行云事一毛半の字
とト七字の離別をと通や乞未堪為得之謂也
いふをくふ右の書

二十二番

右端

有家朝居

是日並れ野も乃君す萬葉と離高間

右

家澄

左

丸をみゆる今山里宿間乃君其成ひとよ
右右左よよせ離之也 判左守野字子重
與次右守山家乃君も乃君所行くに而
離心ありと恐くせり但左ソホモ去日
時とくらがうづ離門仍不離傷身

二十三番

右端

有家朝居

とくういとわくくじうゆめきふ字を六七字
とくういとわくくじうゆめきふ字を六七字

右

経家

とくういとわくくじうゆめきふ字を六七字
とくういとわくくじうゆめきふ字を六七字

左右庄同村之由名下と判えし又前庄不
古今集乃縁あつひと由名下と云まひゆ
さよめふ可比心す下つてくもの傷劣る
主計也近古の事ある川越乃祠不被廢寺も

二千畳

左 拙

女房

右はう右壁乃下れやみわうれ掌窓や極う原

右

年蓮

主ぬへこそりやせ金井もく縁よし萩乃木原
左右庄よ因縁もくと判え左こそ乃

二千畳

賭射

左 脳

女房

主右氣主右坐へよかまむけもく下防檻らば

右

中高櫛冬主

百疊あらうき海あらう檻わらひのくそくよへわが
右方下へよか寄る御手あくもひう事や左うち
主右え題えひ中へ判左寄る養えねうらも
心だくさくとく行う猪よび

左

二十六番

右

王家明居

心ありのれ縫りぬき多井もあ庭よしのひまと

右揚

寐蓮

揃うひまゆけらむとれど心よしむる重いの上人

右方や云左寄秋匂のねりれど左方や云右寄

それ上人主義ようみす判左可上右傳

二十七番

右揚

兼家新居

揃う去れ重井といひきまでじよびよやく重いの重

右

經家

揃うまうけぬまやふがんこすまくまあらわく

右方や云左寄春相難左方門首尾重複

判云右寄儲家重複はくまくからうかくや

丁為左揚歌

二十八番

右勝

重慶

左寄小ひまゆけのねり揃うけのうのう

右

達信明居

・
・
・
・
・

二十九

方
故

四庫全書

わくはうけでひきよれへわくくまのあたへせん

卷

信室

侍ひよのまなす事に、ちうやうと多くあゆい舞打禮より、かうの御

春山はよしの間のりゆびとよふらうとく九重
か雲ノ峯のうらよがまくひのむかにけり荆云古
名乃持弓矢のいと云九重とゆうてす
あとひりてむかはるゝも學も情も

二十一

七
花

卷之三

西をへて門庭乃持りじよかつてあらわす

右

傳引之去而至中止。此皆其一端耳。故曰：「

古方やくふうに可か年とあるよつてんと、

ソシ方漁ニ毎年冬事候多きもう積よりよし
をれり也方ア云古可サモ羅難判立方復四累
えゆるスノト古又未免とれりあふくの魚也
さかくれく羽儀をりあめテ入れまくま

や

番

ちわ

顯服

ワタリジウキトキハムラハ難モヒキトナホル

古

寐蓮

高葉木にじよ日にあら木アハ象路也あ孫孫也角

古方ア云方あうり國森くへぬとくとく
ヤクレキムハヌアリヒツツハ浦乃ありり陳云
ナリムリ無キムリニ活よ方葉集小さん
アリムリムリ之入浦の流百角一師阿マトナ
ルヒムリ方ア云古可家物也くの様
絲ハ野くらうよあくや古漁多日ウ
ミ乃すとろもと野とくよりりや判立
石奇角也は無乃モリナリ二活よモア
キスヘト松とじれよそくもだくとりどつひ
きりと云達也うわくヘと方葉集トヘテノ祖

主事有翁号曰竹取山翁 壬申亥月登華臺
望忽值薰衣子之女子百媚爭嬌花容羞色
略无之也此子之海望極乃可小退也而中
緒之士未嘗不為之也總方薰集之于竹院
亦以一芳人也之故集之餘頃之也若
假假若以付其也此予頃之故本于今雖猶之同
左之誰人之院可為竹南戒師時之說以同
あや浦件能并九女子亦可中是竹院
細計之先頃之定之院之久之欲至之又二
所よし奈ハ高行ハ高圓之經也あらへ管見

之陽唐韻之多矣之謂也り水野翁之言
寧也たうじてはう一くゆきりゆくもうちあら
ゆくひきりうるを徑行にてとひすりん
体のめのまのさとよねむじくともやまと
姿詞不可度幾次於古文の常也下も千と
多く竹葉之行も清人難えし御乃物ゆく
れえん

卷

右端

多種

もじもじもじもじもじもじもじもじもじもじも

もじもじ

七

中官擅天下

うつうちえんまのすとせんじゆくの
者方アガフ云々乃哥野越乃心之角カツカツや小角コツコツ
時ハシマ銀ギン乃もて極ヒツよき見ミタケテ
玄クニ壁カニ被ハサウいふよもわハシマ人ヒト時ハシマ風カニ也ハシマあらよ
も即ハシマかの方アガフ云々前マサニ達タマシ後ハシマ日ヒあらよ
乃アガフ御マサニ野マサニ越マサニ乃アガフ心ハシマ行ハシマわききり判ハシマ乃アガフ哥マサニ猪マサニ
宜ハシマ也ハシマ小角コツコツと見ミタケれ
乃アガフ御マサニ不ハシマ處マサニ欲マサニ有マサニ緊マサニ次マサニひ狗マサニか
今ハシマ角コツコツと見ミタケる

三

九
編

٣٦

三

卷之三

三

三

卷

1

1

ちくにうねりまづあらゆる様にじひれ
ましの日くはとせりんとく秀ひ
すらうかじゆがめまく下向てゆる
ああらわらに構ゆく所乃通ひ
あまうわがわんた勝すけぐ

四書

右也

兼家朝臣

とひらへてみつりのまくはるかに

右

清江物語

浦ゆす目にかきめのまくはるかに
右も下もあわりゆくまくはるかに
望むよと下向てゆくまくはるかに
野遊よとゆくとゆくとゆくとゆくと
ま日教外一毒打方奇能あくともも
固あくともも一毒打方奇能あくともも
ゆくや判云少しうなぎのいもこれりひよ
角致おとそく

三書

左端

女鹿

秋山と秋山のうをはくはくと秋山と秋山

古

信宣

重きに此の聖へとあらびえ言人乃し
古も感氣すて一旨の方一云人
也れ物も聖也。しの風來くわざ
今もうやき難はあらむとある
判云古寺の爲めにもじてゆるを正しく行
あへて古寺ちひき人をみる此聖の身
つりはあへたまき人を難むるは
よあら聖へとあるよりよけ聖也。聖
也もとへきへハ丁度あらぬ

大藏

左

宣家源居

家が去れぬかしもるれぬ。聖もれ法也
右 宣家

也もらてこもるれぬむれ。聖もれ法也
右古也よア難也。判云古寺の爲めに
よねう。古寺の爲めに。聖もれ法也。山
もれ。山もれ。山もれ。山もれ。山もれ。
山もれ。山もれ。山もれ。山もれ。山もれ。

مُسْكَنُ الْمُرْسَلِينَ

وَالْمُرْسَلُونَ

